

笹川記念保健協力財団 日中交流事業
中国医科大学での内分泌内科学交流報告書

愛知学院大学 心身科学部長
健康科学科 教授 佐藤 祐造

2010年6月16日(水)～20日(日)迄訪中し、中国医科大学盛京医院(第二附属病院)第二内分泌科主任李玲教授を訪問し、以下の事業を行った。



I. 内蒙古自治区シリングルメイ病院副院長朱克峰主治医師に対する糖尿病を中心とした内分泌内科についての指導：

近年内蒙古でも肉食中心で野菜不足の食生活とモータリゼーションの普及に伴う運動不足により糖尿病(2型)など生活習慣病が急激に増加している。朱医師は医師が約200名勤務している200床の病院の副院長であるが、医療事情は「発展途上」で内科、外科という大別はあるものの、消化器、循環器、内分泌代謝などに専門化はされていない。朱医師は2010年4月より6月まで3ヶ月間、中国医科大学盛京医院(第二附属病院)第二内分泌科主任李玲教授のもとで、糖尿病を中心とした研修を行っているが、朱医師に日本における糖尿病診療の現状について説明した。ことに、経口血糖降下薬の作用機序別の投与方法、インスリン治療の原則について指導を行った。内蒙古の現状では、糖尿病患者の2%程度にインスリン治療を行っているとの事であるが、網膜症、腎症など合併症予

防のためには、糖尿病発症早期よりの良好な血糖コントロールが重要であることをエビデンスを示しつつ、詳細な説明を行った。



II. 中国医科大学盛京医院(第二病院)第二内分泌科での講演：

中国医科大学滑翔キャンパス盛京医院(第二附属病院)第二内分泌科教室にて、李玲主任教授、劉聡教授(副主任：(財)笹川記念保健協力財団で留学)をはじめ、助教授、講師、助手、大学院生等、約 15 名を対象に講演を行った。

タイトルは「日本における糖尿病の臨床 2010」(Clinical aspects of diabetes mellitus in Japan 2010)であり、次の項目に関して、スライドで供覧した。1. 糖尿病の分類と発症率、2. 糖尿病合併症、3. 糖尿病の治療方法 1) 食事療法、2) 運動療法、3) 薬物療法(1)経口血糖降下薬、(2)インスリン、4. 医学教育制度、5. 今後の生活習慣病対策の推進。

ことに、糖尿病患者の頻度、比率の国際比較、糖尿病の病型と比率、糖尿病合併症の発症と早期治療の必要性、食事・運動療法(ことに後者に関しては、太極拳と運動、乗馬様他動的運動機器を用いた運動など、最近の自験成績や李玲教授の名古屋大学大学院留学時代の研究成績:L. Li, Y. Sato et al「Rat C peptide I and II stimulate glucose utilization in STZ-induced diabetic rats」(Diabetologia 42:958-964, 1999))も紹介した。また、経口血糖降下薬の種類とわが国における使用頻度、さらに、ヒトインスリンとアナログ製剤の使用比

率など、インスリン療法の現況等について、多くのカレントな文献を参照したり、複数の製薬メーカーの協力により作成した最新の資料に基づいたスライドを用いて詳細な説明を行った。

その後、質疑応答を行い、糖尿病運動療法実施によるインスリン抵抗性改善の分子生物学的メカニズム、発症間もない症例に対するインスリン療法導入の必要性等について日中双方の研究・臨床成績に基づき、ディスカッションした。



III. 李玲教授との情報交換

李玲教授の学位(医学)取得後の帰国に際して、名古屋大学大学院医学系研究科健康スポーツ医学分野(主任:佐藤祐造教授)より正常血糖クランプ法実施に関する研究器材(インスリン・ブドウ糖持続注入器、簡易血糖測定装置、血糖測定用チップなど)を供与したので、その後の研究の進行状況について質問したところ、同器材を用いて活発な研究活動が継続されていることを確認した。

また、本学大澤功教授、宇野智子准教授、長崎大准教授、北村伊都子講師、渡辺智之講師、矢野朱美秘書、名古屋大学押田芳治教授や米国在住の秦柏林博士など、李玲先生が大学院生時代の研究室の教員や同僚の現在の活躍状況について種々説明した。

IV. 中国医科大学滑翔キャンパス盛京医院(第二附属病院)第二内分泌科病棟の見学

李玲教授が主任教授を務める病棟および同病院リハビリテーション棟、人間ドック棟などを見学した。病床数は約 2500 床との事であった。

病棟には糖尿病に関する種々のポスターが掲示され、患者教育に用いられていた。やや広い(約 100m²)エレベーターホールは、糖尿病患者教育にも活用され、運動指導員による患者に対する運動指導も行われているとの事であった。

外来棟も見学し、外来診療の状況について説明を受けた。

午前中に採血、検査を行い、当日午後の診察で検査結果の説明を行っているとのことであった。

V. 中国医科大学南湖キャンパス盛京医院(第二附属病院)の見学

約 4000 床という非常に大きな病院であった。

李玲教授は糖尿病についての「特別外来」を行っておられ、糖尿病患者は外来診療にあたって 1000 円(?)程度の「追加料金」の支払いが必要となるが、採血等も一般患者とは別の場所で行われ、患者サービスの向上が図られているという。

大臣、総領事クラス等用の「超特別外来」も見学した。

VI. 中国医科大学附属第一病院見学

中国医科大学附属第一病院(旧満州医科大学)を訪問し、内分泌科外来、病棟、同大学附属生物学実験室等も見学した。

VII. 中国医科大学国際交流センターとの懇談会

国際交流センター主催で、副所長潘伯臣教授、王琛氏(Mr. Wang Chen)、李玲教授、朱克峰医師などが出席した送別会を開催していただいた。

種々懇談したが、潘教授は産婦人科が専門で、日本政府招聘国費留学生として、旭川医科大学で学位取得したとの事であった。

その際、中国医科大学には日本語医学コースが満州医科大学以来開設されているが、同大学卒業生を日本に留学させ、日本の医師国家試験合格後、小児科、産婦人科など、我国で不足状態にある医師として勤務していただいたり、無医地区での診療に従事していただくのはいかがとの提案があった。また、日本からの同コースへの受験も大歓迎であり、可能なら同コース卒業生の日本の国試受験の可能性も検討したらいかがかということであった。

文部科学省、厚生労働省との協議を要するが、貴財団としても検討されてはいかがかであろうか。

VIII. 結論

今回は笹川記念保健協力財団 日中交流事業 中国医科大学での内分泌内科学交流により中国医科大学での内分泌内科学交流を行った。

長年にわたって、このような交流事業、留学生援助事業等を行って来られた貴財団に感服するとともに、心より御礼申し上げる次第である。



以上
(2010年6月24日)